



「みたまのふゆ」とは、私共が常に蒙りいただいております大神様の恩徳、加護、御神威を尊称した言葉です。人間は自分ひとりの力で生きてゐるのではなく、つねに「みたまのふゆ」をいただいで、生かされてゐるのです。

令和四年度節分祭

追儺御歩射式を齋行

例年、節分祭には金沢八景共栄会の皆様のご協力で「豆まき」を実施してきましたが、一昨年は社務所建設工事中により、また昨年は感染症蔓延防止のため実施できませんでした。本年は、神前での神事のみならず「悪疫退散」の願ひをより一層込めたものを過密を避けながらも実施したいと、「追儺御歩射式」として実施することといたしました。

宮司の「射祓」に続き、八人の射手により大的めがけて破魔矢を射かけて「悪疫退散」を祈りました。

(三面に関連解説記事。写真は「陶器の店八雲」店主の曾田さまの御提供。)

令和四年度祭事暦

- 一月 一日 歳旦祭
- 鶏鳴神事
- 二月 二三日 天長祭
- 三月 二一日 春季大祭
- 祈年祭・合祀神例祭
- 四月 二九日 昭和祭
- 五月 十五日 例大祭
- 神社本廳献幣使参向
- 琵琶島弁天社へ神輿渡御
- 六月 三〇日 大祓式
- 大祓人形納め・茅の輪神事
- 七月 一〇日 天王祭出御祭
- 本社神輿御霊入・宮出渡御
- 七月 一二日 三つ目神楽
- 無形文化財湯立て神楽
- 七月 一七日 天王祭巡幸祭
- 天王神輿町内巡幸
- 七月 二四日 手子神社例祭
- 九月 一日 浅間神社例祭
- 九月 一七日 熊野神社例祭
- 無形文化財湯立て神楽
- 一〇月 一六日 手子神社秋祭
- 無形文化財湯立て神楽
- 一一月 二三日 秋季大祭
- 新嘗祭
- 一二月 八日 歳の市
- 開運熊手授与
- 一二月 三一日 大祓式
- 大祓人形納め
- 毎月 一日 月次祭



「鎌倉殿(源頼朝)」と瀬戸神社

平治の乱の敗戦により、頼朝は伊豆国に配流の身となつてをりましたが、以仁王の令旨を受けて挙兵し、目代の山木兼隆の屋敷を急襲しました。その日はあたかも伊豆一宮である三島大社の祭礼日でありました。

直後、石橋山合戦に敗れ房総に逃れますが、この間には伊豆山権現、箱根権現のご加護を受けたとされます。そこで、鎌倉に根拠を定めたあとも「伊豆箱根二所」と称して、三島明神、箱根権現、伊豆山権現を特別に崇敬しました。

そして鎌倉の周囲の要所を選んで三島明神を祀ったと言はれます。その一つが瀬戸神社であり、古来、治承四年(一一八〇)のことであると伝承されてきました。

◎ 水戸の徳川光圀(黄門さま)は学問研究に熱心な方で、実証的な学問を推奨されました。この伝統が後に「水

戸学」と称される学風の基となるのですが、武家政治の基本は最初に幕府が置かれた鎌倉にあるとして、鎌倉の史料を探索させ、これを纏めて「新編鎌倉志」を編纂させました。

◎ ここには金沢の事跡や瀬戸神社のことも記述されます。その中に「瀬戸神社を勧請したのは治承四年の四月との伝承があるが、その時頼朝は旗揚げ前で、まだ伊豆にゐるのでこの伝承は疑わしい」との記述があります。年代や史料をしっかりと読み合はせる実証的な記述です。

◎ 江戸時代後半(文化・文政期)に編纂された「新編武蔵風土記稿」もこの説を踏襲してゐます。

◎ それでは、頼朝が瀬戸に三島明神を勧請したのは、実際にはいつのことだったのでせうか。

瀬戸神社に残る古文書の中に「聞書先後不問記」といふものがあります。

正徳年間に書き残された種々の覚書を寄せ集めたメモ記録のやうなものです。

◎ この中に瀬戸神社の勧請については次のやうな記述があります。

日頃、三島明神を崇敬してゐた頼朝公は、鎌倉近在に勧請すべき所を定めるため、由比ヶ浜に出て「一、二、三」を記した札を流したところ、「一の札」は瀬戸に、「二の札」は森戸に、「三の札」は釜利谷に流れついた。そこでそれぞれに三島明神を祀り、「一の札」の瀬戸には百日の参籠をしたといふことで、それが文治元年四月八日であつたといふことです。

伝説めいた話で、厳密な意味で史実とは決定できませんが、文治元年(一一八五)は壇ノ浦で平氏が滅亡した年であり、年末には諸国に守護・地頭を置くことが勅許されてもゐますから、鎌倉での統治の態勢も定まってくるころであつて、このころに三島明神の勧請がされたとしても不自然ではないでせう。



谷津町鎮座

浅間神社

谷津の町の鎮守として古来崇敬されてきました。伝説では御堂関白太政大臣藤原道長が当地に來遊し、能見堂から金沢の景勝を鑑賞したときに、正面の目の下にあるこんもりとした山を塗桶山と名付け、そこに浅間大神を勧請したといはれます。道長の來訪は史実ではありませんので、創建の詳細な時期は不明ですが、富士山信仰が関東一円に広まつた中で当地にも勧請されたものでせう。ご祭神は富士山の浅間神社と同じ木花之佐久夜毘賣命です。特に安産の御利益があり婦人の崇敬が篤かったと伝へます。御祭神が天孫瓊瓊杵尊の御后となり、御子神等を出産されたことによるものでせう。

◎ 祭礼は六月一日の開山祭と九月一日の例祭。例祭(近くの土曜曜)には谷津・東谷津・泥亀の各町内で神輿の巡幸その他のにぎやかな行事が営まれます。寛正四年(一四六三)西山松眠といふ医師が神饌田を奉納、以来、例祭には赤飯をお供へし、お下がりには崇敬者婦人が分けあつたといふことです。

頼朝が参籠したときには、社前の海でみそぎをしましたが、その時に「服」を掛けておいた石が「服石」で、後世これを「福石」とよぶやうになりました。

◎

さらに、洲崎にある龍華寺の縁起に記載されたところよりすると、やはり文治のころのこととして、瀬戸神社勧請に際して文覚上人の計らひにより、神社を護持するために神社西方の六浦山中に「浄願寺」といふ寺院の建立がなされたとのことです。当時は神仏習合の時代でしたから神社の管理は寺院の僧侶がするものだったのです。

寺域は、山高からずといへども深山幽谷のごときで、奇岩霊窟があったり、仏前に供へる清らかな湧き水が年中絶えることがなかったりして、そこに多数の堂塔が築かれ、仏像が安置され数々の寺宝も納められたとのことです。

この浄願寺は、室町時代になって光徳寺といふお寺と合併して今日の龍華寺となったそうです。

浄願寺のあった六浦の山中とは今日の金沢八景駅西側「御伊勢山・権現山」の一带でせう。奇岩霊窟といふのは、「上行寺東遺跡」をはじめ一帯のヤグラ群を指すのかと思へます。

江戸時代に東照宮が祀られた「金沢八景権現山公園」も寺域の一部であったのではないでせうか。

◎

文覚上人は、養和二年(一一八二)江ノ島に二十一日間の断食参籠をして奥州の藤原秀衡を調伏する祈願をしたことが「吾妻鏡」に記載されており、実在の人物ではありませんが、その行動には突飛なところもあり、種々の伝説もあります。

僧としての修行時代に、熊野の那智の滝で三日三晩の滝行をしたところ、気を失って水没してしまいました。だが、不動明王の脇士である矜羯羅童子、勢多迦童子が現れてすくい上げてくれたといふ伝説があります。

「熊野那智参詣曼荼羅」の那智の滝の部分にはこの場面が表現されています。(写真は國學院大學所蔵の熊野那智参詣曼荼羅の一部)



浦賀の東叶神社・西叶神社も文覚上人の勧請と伝えられます。

また、北條時政が江ノ島に参籠して子孫長久を祈願したところ、現れた弁財天が竜に姿を変えて消えた後

に鱗が三つ残ってゐたのが北條氏の家紋の起源とされます。政子が瀬戸に竹生島弁財天を勧請したといふのも、このやうな北條氏と弁財天信仰の繋がりがあつたからでせう。

御歩射神事について

弓で矢を射る神事・行事・武芸には種々ありますが、流鏝馬や犬追物のやうに乗馬して行ふものを「騎射」といふのに対して、地上に立って行ふものを「歩射」と言ひます。

神事として「災厄消除」「豊年満作」を祈願して正月行事として行はれるものは「御歩射」(オビシャ・オブシャ)ないしは「墓目」(ヒキメ)と称され、全国各地に民俗行事・神事として伝承されてゐます。

当地には現在はその伝承はありませんでしたが、今回、節分行事として各地の伝承を勘案し、「悪疫退散」の趣意を特に込めたものとして実施することとしました。

的には角なしの「鬼」字を書きました。これは「甲乙ム」の文字を組み合はせてあります。「ム」は「無」で「甲乙無し」は「甲乙をつけない」平等で平穏・平和な世の中となることを念じる意味があるものと言はれます。

今回の射手には金沢八景共栄会、瀬戸町内会、玉垣会、横浜金沢シティガイド協会のみなさんにご協力いただきました。

朝比奈町鎮座 熊野神社

社伝によれば、鎌倉に幕府を開いた源頼朝が、その東北の守りとして熊野三社をここに勧請したものとひまます。仁治二年(一二四一)、鎌倉幕府は朝比奈切通しの開鑿に全力を挙げ、執権北條泰時は自ら現場に臨んで工事を指揮しました。社殿の建立もこの頃行はれたこととせう。

その後、元禄八年(一六九五)、地頭加藤太郎左衛門尉良勝が神殿を再建してから、里人の崇敬を集め、相模国鎌倉郡峠村の鎮守として崇敬されてきました。安永及び嘉永年間には再度の修築も行はれて、明治六年村社に列しました。

昭和五十三年、氏子一同の熱意を結集して、入母屋造、総檜、銅板葺きの本殿を完成し、さらに平成御大典記念事業として新たな拝殿を建築竣功して今日に至つてゐます。

御祭神は速玉男命、伊邪那岐命、伊邪那美命の三柱です。

例祭日は九月十七日で、昔ながらの古式にのっとりた湯立神楽が今も続けられてゐます。

瀬戸神社略縁起

大昔、今の泥亀町、大川町、釜利谷町小泉のあたりまで海が入りこみ、柳町や六浦町の塩場、南六浦、内川町内もすべて海でした。そして洲崎と瀬戸の間は、潮の干満時には急流が渦を巻き、容易に渡れぬ難所でした。古代人がここに海神を祀ったのが瀬戸神社の起源で、今から千五百年以上も前(古墳時代)のことです。

治承四年(一一八〇)鎌倉に入った源頼朝が、日頃崇敬する伊豆三島明神をこの靈域に遷祀してからは、六浦港の守り神「瀬戸三島大明神」として鎌倉幕府をはじめ上下の尊信をあつめ、その後、足利氏、小田原北条氏の崇敬も篤く、江戸時代には名勝金沢八景の中心にあつて、百石の社領を有する大社として、江戸の町民の間にも信仰者がひろがりました。

明治六年郷社に列格、戦後は宗教法人となり神奈川県社廳勅使参向神社に指定。現在の社殿は寛政十二年の建造で、昭和四年に屋根を銅葺きに改め、平成二十四年には御屋根替へと修増築の御修営事業が行われました。社務所(淑月館)は令和大禮記念事業として令和二年三月に竣工しました。

御祭神

大山祇(おほやまつみ)の命

伊豆国三島大社、伊予国大三島の大山祇神社の御祭神と同じ海上交通の神であると同時に、水源地を司る山の神であり、金属、岩石、木材などの建築資材や、森林、鳥獣に至るまで、一切の生活資源は、この大神の恩徳によるものです。

天孫瓊杵尊の御后となられた木花咲耶姫の御父神にあられます。

須佐之男(すさのを)の命

配祀の神の須佐之男命は、天照大神の御弟神で、八俣の大蛇を退治された神話は有名です。自然界、人間界の罪けがれや悪者を追い祓ひ、人々の苦しみを除いてお守りくださる神様で、別名を「天王さま」と仰がれてゐます。

七月の天王祭りには大神輿で氏子町内をくまなく御巡りになります。

菅原朝臣道真公

天満大自在天神とも尊称し、一般には「天神さま」と親しまれて呼ばれます。書道、学問、詩文、和歌に秀でてをられただけでなく、至誠、尽忠、孝道、正義、国家鎮護の神さまでもいらっしやいます。

春日灯笼一对の御奉納

新社務所「淑月館」前の石段上に、春日灯笼形式のアルミ製燈籠が奉納されました。夜間の社務所や境内への出入りが便利になりました。

奉納者御芳名を記し、感謝の意を表します。

奉納者御芳名

株式会社木村工務店木村久仁夫殿
瀬戸神社敬神婦人会野の花会殿



瀬戸神社

〒三三六-0027
横浜市金沢区瀬戸十八-14

(電話) 〇四五-七〇-一一九九二

(FAX) 〇四五-七〇-一一九九四

<http://www.setojinja.or.jp>

釜利谷町鎮座

手子神社

釜利谷町総鎮守の手子神社は、もとこの地の領主伊丹左京亮が、文明五年(一四七三)瀬戸神社の御分霊を宮ヶ谷の地におまつりしたものです。

延宝七年(一六八〇)、伊丹氏の子孫、三河守昌家の子で、江戸浅草寺の智楽院忠蓮僧正が、現在地に遷祀して以来、釜利谷一郷の総鎮守として信仰をあつめて来ました。

明治六年村社に列格、大正十二年の大震災で倒壊しましたが、同十五年再建し、昭和四十五年には御屋根も総銅板葺きに改修し、一段と御神威を加へました。

御祭神は瀬戸神社と同じく大山祇命、例祭日は七月十七日(現在はその後の日曜日)ですが、十月十五日(前後の日曜日)の秋祭りには、古式豊かな湯立神楽が昔ながらの伝統を守もって行はれます。

境内の洞窟にお祀する竹生島弁才天は、金沢八景のひとつ「小泉の夜雨」の中心地にあつたもので、厄除け、開運の福神として信仰されてゐます。